著者自身による新刊書紹介

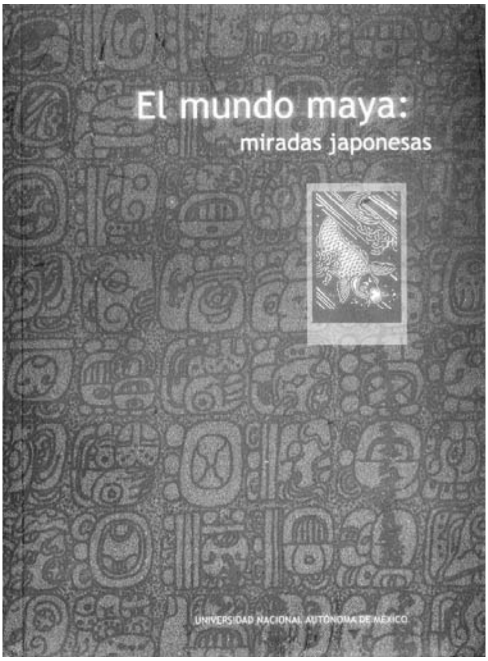
El mundo maya: miradas japonesas, Kazuyasu Ochiai, coordinador, Unidad Académica de Ciencias Sociales y Humanidades, Universidad Nacional Autónoma de México, Mérida, 250pp., 2006 ✍ 一橋大学・落合一泰

本書は、日本人マヤ学者 10 名による研究論文集である。

科学的であるか否かと国籍の如何は、原則として無関係であろう。したがって、miradas japonesas（日本のまなざし）という本書のオリエンタリスト的副題に実質があるかのように捉えるのは無用であり、危険ですらある。しかも、人や文化が移動を積み重ねていく現代世界である。研究者の国籍と研究を進める所属機関の所在国が一致しないことも、まれではない。それでもなお、日本、イタリア、フランスなど国単位で世界のマヤ学者の研究成果を叢書化したいという、ユカタン州メリダ市に新設されたメキシコ国立自治大学社会科学・人文学院のマリオ＝ウンベルト・ルス院長の 2003 年の提案に筆者が応じたのには、ふたつの理由があった。

第一に、複数研究者の仕事を一冊にまとめて広く学界に示すことは、それぞれの研究の視認性を上げる効果をもたらす。ただし、全体イメージとしての「日本」が各論文に投影される危険性をあらかじめ排除しておく必要がある。第二に、本書は、今後の国内のマヤ研究者が日本の「初期」研究者を乗り越えていく上での里程標になりうる（素通りでも迂回でもかまわないが)。編纂に 3 年を費やして 2006 年に上梓した本書がこれら所期の目的を達成しえたかどうかは、読者諸氏や学界の今後の反応を待つほかない。

本書の構成は、次の通りである。



Kazuyasu Ochiai
Introducción
Takeshi Inomata
Actuaciones teatrales y poder en las cortes reales de los mayas del Clásico
Kazuo Aoyama
El estudio de la lítica maya y la organización socioeconómica: dos casos de estudio en Copán y Aguateca
Yoshiho Yasugi
El enfoque de agente en los idiomas mayas
Tsubasa Okoshi
Kax (monte) y *luum* (tierra): la transformación de los espacios mayas en el siglo XVI
Shigeto Yoshida
Las enfermedades del cuerpo maya y sus síntomas “fisiológicos” a través de un análisis del maya yucateco colonial
Joji Hatsutani

El ciclo anual de vida de los mayas de Quintana Roo: una investigación de campo en el archivo

Junji Koizumi

Etnicidad y Estado nacional en Huehuetenango, Guatemala: el resultado de las elecciones y el problema del nacionalismo comunal

Mitsuho Ikeda

Reflexiones sobre la violencia política y la antropología: la actualidad guatemalteca

Motoi Suzuki

¿Cómo apreciar las organizaciones mayas en Yucatán? Un dilema para la Antropología del desarrollo

Kazuyasu Ochiai

El ser y el tiempo entre los mayas: “Un trompo no se cae mientras siga girando”

各章の内容は、そのタイトルから、あるいは各著者のこれまでの研究実績から、ある程度推し量っていただけると思う。紙幅の関係で、ここではその詳細には立ち入らない。そのかわり、本書を手にとらないかぎり中身の分からないIntroducción の一部を、以下に加筆のうえ抜粋させていただきたい。日本のマヤ研究の到達点を文献表で一覧することも有意義だが、それは一部ですでに行われている[1]。そこで、この序論では、日本のマヤ研究の発端を、より広い歴史的脈絡で世界の読者に説明してみたいと考えた。冒頭に述べたように、研究者の国籍を研究の傾向や質に直結できるとは思わない。しかし、新大陸の先住民文明への学術的関心が、なぜ戦後日本に立ち現れたのか。仮説的であるにせよ、それを語ることが、オリエンタリスト的解釈を排除し、本書所収の 10 本の論文をその達成においてのみ評価してもらうために必要な手続きであると筆者は考えた。

総じて人間科学や百科全書的関心に裏打ちされて進められてきたマヤ研究だが、その学史にも文明史的背景が垣間見られる。植民地宗主国として踏査的関心を出発点としたスペイン。19 世紀の地政学的関心との関連においてメキシコ学を推進したフランス。古代文明やルネサンス文化のローカル性と国際性がともに際立つイタリア。新大陸諸文化を鏡に自身の立ち位置を考えてきたアメリカ合衆国。国家的アステカ主義の陰に隠れたために一定の科学的研究が進んだメキシコ。国単位でまとめることには無理があるが、それぞれの出発点にその後の学問的色調の発端を見ることはできる。では日本の場合、それは何なのか。本書の序文の問題関心は、この点にあった。

従来と異なる世界史『歴史哲学』(1765 年) を構想したヴォルテールは、野心満々だった。彼は、当時の歴史認識に満足していなかった。それは、古代エジプトをすべての源と捉え、エジプト、メソポタミア、ギリシャ、ローマをもって「文明」すなわちキリスト教文明の揺りかごとみなす歴史観であった。聖書の世界に閉ざされたこのような歴史を、ヴォルテールは「世界史」と認めなかったのである。

『歴史哲学』において、ヴォルテールはエジプトやティグリス、ユーフラテス両河の岸辺の

[1] Aoyama, Kazuo, 2002, “Mesoamerican archaeology as anthropology and history: Anthropological archaeological research in Mesoamerica by Japanese scholars.” *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3:31-55; Ochiai, Kazuyasu, 1989, “Latin American Indian studies in Japan: Minimum information.” *Latin American Indian Literatures Journal* 5:1:90-98; Ochiai, Kazuyasu, 2001, “Contribución de los investigadores japoneses a la antropología y la etnología en México: De la década de los 70 a la década de los 90.” *Recopilación de Ensayos e Investigaciones de la Fundación Japón en México* 1:57-66.

住民だけでなく、インドや中国など聖書世界から外れた東方の人々についても記述を試みた。その筆法は比較をむねとし、人類学的であり、畢竟近代的でもあった。それゆえに、同書は聖職者から手ひどい批判をこうむることになる。実際、その出版すら危ぶまれるほどだったのである。

ともかく啓蒙主義者ヴォルテールは、当時の知的教養と対決する術を心得ていた。しかし、2 世紀後、ユーラシア大陸の反対側で自分のアイデアが再生することになろうとは、想像もしていなかったことだろう。

それは、ナイル河、ティグリス河とユーフラテス河、インダス河、揚子江と黄河の周辺にほぼ同時代に栄えた古代文明に対する関心が、一気に盛り上がった戦後日本社会の話である。それらに「世界四大文明」という総称が新たに冠せられ、学校の歴史教科書に初めて登場したのは、1952 年のことだった。世界四大文明という名称は、それ以前には世界にも日本にも存在していなかった。なぜこの時期に日本でこのような関心が興隆したのか。当惑しているに違いないヴォルテールに、そこを説明したいと思う。

1867 年に徳川幕府が倒れ明治政府が成立して後の日本の国是は、国の西洋化と近代化にあった。脱亜入欧がモットーであったのは、近代ヨーロッパこそ模倣すべき文明とみなされたからである。政府は能力ある若者を欧米に派遣するとともに、あるべき近代化の指導者として多くの欧米人専門家を雇用した。また、プロイセンの憲法、フランスの民法、イギリスの軍事システムなど、西洋の考え方や制度を導入した。1905 年、日本は当時のスーパーパワーであったロシアとの戦役に勝利した。日本が帝国主義国家の姿をとり世界有数の植民地国家に変質していったのは、この時期以降のことである。

1941 年、近代化に邁進していた日本は、同じように急速に近代化を遂げていたアメリカ合衆国に宣戦を布告した。しかし、1945 年 8 月の広島、長崎への原爆投下ののち、日本は連合国軍に敗退した。敗戦は、日本人に物理的傷と精神的傷の二つを残した。軍民あわせて 310 万人の命が失われ、国土の多くが焼け野原となった。この人的・物的損害は、戦後の経済復興が示すように、敗戦後 30 年で大きく回復した。しかし、戦争を経験した世代の内面には、不可視の精神的傷が刻印されていた。

国土のあちこちに展開するアメリカ占領軍を目の当たりにした国民は、日本の近代化がアメリカ合衆国のそれに劣っていたと認めざるをえなかった。そうしたなか、戦後まもなく、日本の近代化についての議論が沸き起こった。日本の近代化は不十分だったのか？ 正しい近代化でなかったのだろうか？ 徹底した西洋化に向かう努力が足りなかったのか？ いや、西洋を模倣するのではなく日本流の近代化を案出すべきだったのではないか？ それにしても、明治以降の日本に近代化政策は不可避だったのか？ オルタナティブはありえたのだろうか？

日本は、西洋という地理的・文明史的文脈から遠く離れて近代化を遂げた国である。そこに懊悩の原点があった。それは、地元固有性を保持しながら一定程度の西洋化も果たした日本の近代文化を、世界史にどのように位置づけるかという問題である。いうまでもなく、日本文化はひとつではなく、国内にはさまざまな文化が存在している。また、第二次世界大戦では日本はアメリカ合衆国だけでなく中国にも敗北した。つまり、日本文化と西洋文明を対峙させた上記の戦後思考の枠組み自体に問題があったことは、指摘しておくべきであろう。このふたつの事実を国民が認めるには相当の歳月が必要だったの

であり、一部はなお未完である。

いずれにせよ、戦後の日本では、これらの自問に対し、さまざまな応答が試みられてきた。政治的には、共産主義のような新たな枠組みが一定の支持を得てきた。また、敗北をすべて忘却のかなたに押し込めようとする復古主義も見られた。

世界四大文明というヴォルテール的歴史認識が登場したのは、このような時代を背景にしてのことだった。四大文明はいずれもたいへん古い時代のものであり、当時の日本に強い影響を及ぼすことも、戦後日本の自問への回答となるものでもなかった。しかし、それは憧れの対象であり従属をも要求する西洋文明とつきあう悩みを一時棚上げにしてくれた。今日でも、西洋の地で発展したわけでない四大文明の展覧会が開かれると、きわめて多数の市民が熱心に観覧に訪れる。戦後日本人の精神の彷徨に思いをいたせば、それはべつに驚くことではない。

アメリカ大陸の先スペイン期諸文明に対する人類学的関心も、戦後日本の精神的問題と無関係ではなかった。1954年、東京大学に文化人類学教室が開設されると、創始者の石田英一郎と泉靖一は、江上波夫らとともに、研究プロジェクト「新旧両大陸における文明起源の比較研究」を開始した。旧大陸に関しては、江上が専門としていた古代オリエント文明の発祥の地メソポタミアの調査が1956年に始まった。新大陸の古代文明については、石田が1953年にマヤ地方を、1957年に泉がアンデス地方の予備調査を行った結果、1958年にアンデス調査が開始された。このように、戦後近代化論争が巻き起こり世界四大文明史観が誕生したのと同じ時代に、アメリカ大陸先スペイン期諸文明は、非西洋文明の起源に関するメソポタミアとの比較対象として取り上げられたのだった。

石田は、1953年から10年後の1963年にマヤ地方を再訪し、1967年に『マヤ文明―世界史に残る謎』（中公新書）という一般書を出版した。その「まえがき」には、最後に一章を設けて「新旧両大陸にわたる古代文明発生の過程の比較研究から、マヤ文明の位置づけを考え」たかったが、紙数の関係で果たせなかったと記されている。それでも石田は、本書を閉じる直前に、栽培植物、家畜、金属器、技術などについてメソアメリカ、アンデスと旧大陸文明を比較検討している。

東京大学が開始したアンデス調査は、アメリカ大陸文明の人類学的研究を志す有為の若者を大勢吸収し、現地調査の機会を提供した。日本のアンデス調査は、爾来50年にわたり、学術面、教育面において国の内外で高い評価を勝ちとってきた。その結果、日本のマヤ研究は、長い間手薄になった。16世紀、インカの黄金のうわさに惹かれた多くのスペイン人兵士がメキシコから南米に移り渡り、そのためにユカタンの征服が遅れたことを想起させなくもない。

日本人がマヤ地域で本格的な長期現地調査を始めたのは、1970年代なかば過ぎのことである。筆者を含めた戦後世代のマヤへの関心は、敗戦直後の近代化論争に直接根ざしてはいない。しかし、この世代は、近代西洋文明が相対化され始め、第三世界が魅力的に見えた時代に知的形成を遂げている。その意味では、非西洋圏の近代社会を問うという点において、近代化論争世代と同じ枠組みに入っていたとは言えるだろう。

その活動は調査団やミッションのような組織的なものではなく、散発的であった。グアテマラ西部クチュマタン高地、メキシコ南部チアパス高地などで、メキシコやアメリカ合衆国、あるいは国際機関の調査資金を得た２、３の大学院生が、それぞれ個人として長期調査に着手し

たのだった。

1980年代になると、日本政府や財団、国際機関から資金援助を受け、メキシコ（ユカタン、キンタナロー、チアパス）、グアテマラ、ホンジュラスなどで調査に携わる日本人研究者が増加した。1980年代以降の日本の経済発展は、若手研究者が現地調査を計画するうえで、大きな支えになった。日本人考古学者が海外青年協力隊の隊員として調査団を組み、ホンジュラスのラ・エントラーダ遺跡やその周辺の発掘に着手したのは、この時期のことである。以後、ヤシュチラン、カミナルフユ、カラコル、チャルチュアパ、コパン、アグアテカなどの遺跡でも、日本人研究者が組織的な発掘調査に参加するようになった。

以上のような日本における「マヤ学事始」を、世界のマヤ研究者はどのように読むであろうか。まず、スペインやフランス、イタリアやイギリス、アメリカ合衆国やメキシコなどに比べ、100年から200年も遅れてスタートしていることに気づくだろう。また、そのスタートが非西洋圏の近代化社会という日本の歴史的運命と無関係でないことも理解すると思う。日本は西洋文明による被征服という経験を持たないが、非西洋圏にあって西洋化を受容した歴史は、新大陸先住民諸文化のそれと部分的に重なるところがある。日本のマヤ研究者がすべてそのような視点を意識しているとは思わない。しかし、この点において欧米出身の研究者と視座を異にする研究者が存在する可能性はある。

筆者は、マヤ学界での活動において、みずからを日本人と意識したことはほとんどない。しかし、メキシコやグアテマラ、欧米の研究者とはどこか学問的スタンスが異なると面白く感じることはある。たとえば、religion, credo, self, identityなどの用語が飛び交う議論、syncretismのような弁証法的論理が跋扈する論戦などでは、筆者が学ぶチアパス高地ツォツィル社会での現実把握や筆者自身の概念構成や論理とのずれを感じることがある。

西洋化された非西洋圏諸社会には、近代西洋的思惟を一定程度身につけ、それ以外の認識方法も兼備している人間が少なくない。そこでは、弁証法的統合を必然とせず、正反の並立や使い分けという両義的立場が成立している。ただ、それを近代的学術用語で「論理的」に説明することは、なかなかむずかしい。

しかし、日本という非西洋圏の近代社会に生まれ育った研究者が、別の非西洋圏近代社会である現代マヤについて、たとえば西洋圏フランスで知的形成を遂げた研究者と議論するという行為をいかに意識的に進めるかに、筆者はひとつの人類学的な意味を見る。岡崎彰の表現を借りるならば、人類学者は人類や文化に対し常に「未決囚」の立場を崩してはならない[2]。人類学に身を置くこと自体、不確定を生きる人類学的実践でなければならないからである。

本書は、表紙・裏表紙とも、濃いチャコールグレーの古代マヤ文字の連なりが黒地にかすかに浮かび上がるというデザインである。表紙では、和風の鯉の図案がマヤ文字を縫うように泳いでいる。裏表紙には「日本人から見たマヤの世界」と日本語で縦書きされている。このようなジャポニズム的装飾や「日本語はもうひとつのマヤ文字」と言わんばかりのオリエンタリスト的扱いは、編者がもっとも避けたかったところであり、メキシコ側担当者にもその旨をたびたび伝えていた。しかし、著者・編者が表紙まで統御することは、メキシコでは難しい。

---

[2]「『人間』を壊す」*Hitotsubashi Quarterly* 15:32-33, 2007.

筆者が企図した本書の原題も、『マヤ世界―日本人人類学者の貢献』*El mundo maya: contribuciones de antropólogos japoneses* という中立的なものだった。しかし、購買層の関心を惹くためという理由で、最後の段階で『マヤ世界―日本のまなざし』に改題された。

こうして、題名や表紙にはメキシコの大学出版局が考える「日本」が横溢し、古代マヤのイメージと重ね合わされることになった。残念な反面、「未決囚」であり続けるようすがが、そこにあるように思われなくもない。「分かるとは何か」の探求が人類学の出発点であり目標であるとするなら、マヤ文化に関する私たちの「分かり方」や私たち自身の「分かられ方」にかかわるステレオタイプや自己演出なども、すぐれて人類学的な現象である。本書の体裁そのものが人類学の研究対象たりえていることを、筆者は喜ぶべきなのかもしれない。

『ブラジルにおける違憲審査制の展開』（東京大学出版会、2006 年）✍ 杏林大学・佐藤美由紀

調理プロセスを目にすると食卓の料理に食欲を感じなくなることがある。水面下での脚の激しい動きを見てしまえば、湖沼の水鳥ももう優雅とは思えない。とはいえ、著書の執筆過程のハプニングは、他人の目には滑稽で一興かもしれない。笑いに欠ける本なので、こういう形で補うのもよいかと思い、作成の内輪話の執筆を引き受けた。

本書は私の初の単行著書である。「こんなテーマで日本で論文が書けたこと自体が驚き」という、誉められたのか呆れられたのか（おそらく両方だろう）首を傾げる反応もいただいたが、幸い概して好意的な言葉を寄せてもらっている。自ら選んだものであれば、どんなテーマでも書きようがあるし、その材料も手に入れることはかなりの程度は可能な世界に生きている、というのが修士論文作成以来の私の信念（盲信？）だが、そうはいうものの、本書の執筆段階で挫けそうになったことが三回ほどあった。

第一の問題は、違憲審査制の運用状況の把握において生じた。本書のはしがきに記した資料の問題は、既に混乱を極めた修士時代に経験済みで、それに照らせば今回は当初から解決の見込みはあった。関連するブラジルの法律家の文献は、手元にあるものこそ限られていたが、完成までには必要なだけは取り寄せられると、ほぼ確信していた。実際、サンパウロ大学法学部の図書館から送って頂いたり、恩師である二宮正人先生のお力をお借りしたり、あるいはブラジルに足を運んだりという形で、作成したリストの全てとはいわないものの、少しずつ理解の穴を埋めるような資料を手に入れ、制度と学説の状況を説明することができた。しかし、論文を入手したところで、ブラジルの公法学で具体的数量により表現がされることは多くはない。裁判所の過剰負担等、問題の存在について法律家は熟知していても、それを論文において数字を挙げるとなると、伝統的には余り好まれてこなかった。現代的感覚を持ち合わせている著者による数少ない例外の著述だけでは断片的で、現実の法運営を把握するには十分ではなく、これでは運用状況の説明ができない。

そこで、ブラジリアにある連邦最高裁の図書館にある統計資料を通じて、これを補うことができるかもしれないと考え、1996 年の 2 ヶ月のブラジル滞在中、1 ヶ月をブラジリアで過ごし、同図書館に通った。しかし、司法統計年鑑を調べていて、統計の項目立てや基準が比較的頻繁に変わり、連続的な資料として分析するの